



Internet: <http://www.jp.figu.org>
E-Mail: info@jp.figu.org

FIGU in bezug auf ÜBERBEVÖLKERUNG

FIGU 人口過剰シリーズ 2



FIGU - Landesgruppe JAPAN
フイグ・ランデスグルッペ・ヤープァン

Umweltzerstörung als Folge der Überbevölkerung

人口過剰の結果としての環境破壊

以下の論文は、プレヤール人のプターとBEAM [ビリー・エドゥアルト・アルベルト・マイヤー]の間でかわされた様々な対話で、地球という惑星の環境破壊に関して討議さ

れた予言、予想、確率計算をまとめたものである。この環境破壊は、地上人類の人口過剰によってもたらされた無節操な犯罪的・無責任な企みと行動様式の結果である。本論文中

で特に挙げられた詳細なデータと事実は、プレヤール人のプターによる言明と計算によっている。

世界は、滅亡することはないにしても極めて激烈な変化を遂げるであろう。これは人類全体そのものに関しても、またその生活に関しても言えることだ。この劇的かつ激烈な変化がどの程度、現実のものになるかは世界の人口がどのように、そしてどのくらいの規模で増加するか、すなわち将来、世界の人口過剰が引き続きどの程度拡大していくかにかかっている。また同時に、人口過剰に伴う犯罪的な企みによって引き起こされる自然とその動物相と植物相、気候、地球に対する侵害、破壊、壊滅行為が、引き続き無責任に押し進められていくにかかっている。

自然に対する壊滅行為、並びに動物相と植物相に対する破壊行為の最前線にるのが、農業であり、園芸産業などである。しかし同時に、化学的な有害物質を自然とその植物相と動物相に散布し、更に食用植物にもこれを繁茂させ成長させ、雑草、動物、害虫から守るためと称して何百万トンもの化学的有害物質を撒き散らす多くの一般市民も、またこれに加担している。ありとあらゆる種類の食用植物中に蓄積され人間の身

体に摂取される途方もない量の化学有害物質によって、人間は病気になり衰え苦しむ最後には死ぬ。そして、これらの化学有害物質によって貴重な植物、動物、小動物、爬虫類、昆虫、水生生物、鳥類までもが毒に曝され絶滅させられていることは、許されざる更なる状況である。この責は、農業と園芸産業などと共に、農学者、化学物質の宣伝者、更に化学物質の一般利用者が負わなければならない。

それはまず一方で、彼らがその愚かさ、あるいは金儲けの欲のために、無思慮に化学的有害物質を使い、自然の食品にも（また人間の食肉需要のために飼育され屠殺され、当然ながら人間の食料循環に入り込む動物にも）、化学的有害物質を取り込んでしまっているからである。それにより彼らは人間の健康を危険にさらし、健康を損ねるという結果をもたらしている。また他方には、農業と、家畜・家禽を始めとしたあらゆる動物を飼育し肥育するその他の産業がある。これらの肥育動物には、病気になるのを防ぐため、予防的に様々な抗生物質がたつぷりと投

与される。これらの抗生物質は、家畜・家禽・その他の動物の肉の中に蓄積され、それはその食肉を食した人間の体内に改めて取り込まれ、そこで抗生物質に対する耐性を作り出す。その結果、その人は様々な病気から回復することがもはやできなくなり、あるいは感染などから身を守る術がなくなり多くの場合死に至る。しかし、家畜・家禽・動物の飼育業者にとっては、これは全くどうでもいいことなのだ。彼らにとって最も重要なことは、欲まみれの経済的利益のみである。というのも、こうしたものの見方・行動のあり方からいって、つまりこの関連においては彼らは同じ同胞に対する責任、そして彼らが毒を注入し汚染している自然とその動物相と植物相に対する責任を感じていないからである。こうした状況は、将来においても長く続き、従ってこれからも自然界では、植物相と動物相に関して多くの絶滅と破壊・壊滅が起こるのであろう。また、無責任で利益だけを求める、あるいは単に無思慮で愚かで馬鹿げた抗生物質と化学的有害物質の濫用により、これからも世界規模で非常に

多くの人間が(あらゆる社会階層で、老いも若きも)病気になる、衰え、死を迎えることになるだろう。

さて、何も分かっていない愚か者であるにもかかわらず、自分は何でも良く分かっていると思込んでいる、あるいは、その嘘で固めた主張に対して法外な額の賄賂をもらっているあの無類のずる賢い連中は、知性のかけらもない間違いをしでかしているか、根拠のない嘘に絡め取られているか、あるいは完全に愚かであるのだ。これは、彼らが事実をねじ曲げて何も理解できていないままに、全てに対する責任は基本的にそして、唯一化学産業と化学メーカーが負うべきものと思込み嘘を吐き、あるいは幼稚で愚かなやり方でそういう作り話をしているからだ。

彼らは、化学物質によって引き起こされた自然と河川湖沼の汚染・破壊・壊滅という現在の惨事、何千という非常に重要な昆虫・植物・鳥類・動物・小動物などの絶滅(野菜・ベリー類・ハーブ・果物・あらゆる穀類など)、自然食品の汚染の責任は、ひとえに有害な化学製品を製造した大企業とその他のメーカーにあると考える。

しかし、これらの人々が、無思慮に化学的な有害製品を使い、環境・自然の食品・植物・河川湖沼、つまりは自然全体とその動物相と植物相にその有害物質を散布して運び込み、全てを汚染した張本人であり、その無責任で、恥知らず、更に犯罪的行為ゆえに、誰よりもまず責任を負うべき立場にあるということについては、ほとんど、あるいは一切触れられていない。

つまり、化学的有害製品を使う利用者・消費者こそが第一に咎を受けべき無責任な人間なのであり、全て(すなわち人類とその周辺の全てを含む)の自然全体を汚染し、それによって病気、伝染病、更に絶滅、

死・壊滅を招き、引き起こす張本人なのだ、ということは有耶無耶にされている。

これに関しては農業と園芸産業、そして、同様に無思慮・無責任に化学的有害物質を庭や畑、牧草地、路傍[濠]、線路、あるいはそれ以外のやり方で自然と環境に撒き散らす人々と行政が、まず第一に責を負うのだ。すなわち、第一に責を負うのは、より良い迅速な成長のため、また防虫・防獣などの目的で、自然とその動物相と植物相、また自然の食品に対して散布される化学的有害物質を製造・販売する化学産業やその他の化学的有害物質のメーカーではないのである。

責を負うのは、基本的にそれら化学的有害製品の利用者・消費者なのである。自然と環境などに対して投入される化学的有害製品を製造・販売する化学産業やその他のメーカーは、この点では実のところ二次的な位置にいるに過ぎない。何故なら、彼らは化学物質の製造と販売によって、経済的に何十億ユーロの利潤をあげる製造者に過ぎないからだ。

この外、これら全ての化学的有害爆弾は、農学者や宣伝者の嘘によって推奨され、農家や庭師、行政や企業、また個人によって、野菜・穀物・その他の植物の成長を促す目的で、また防虫・防獣の目的で、購入・利用されている。その際常に、経済的な途方もない利潤、あるいはその他の何らかの利点がそうした行動を決定する要素となっている。

このように、全てを汚染する化学物質濫用の責任を第一に負うのは、化学産業や化学メーカーではない。

農家、そして農家に助言を与える農学者、また、園芸産業、行政、企業、そして植物を成長させるため、また直接的・予防的に植物を守るために化学的有害物質を使用する人々なのである。そしてそれは通常、農学者、

宣伝者、また思慮のない一般人支持者の推奨によっている。

ここで繰り返して言う「宣伝された化学的有害物質を使用し、野菜・ハーブ・ベリー類・果物・穀物などの自然の食品に投入し、それらを化学物質で汚染しているのは、実はまず第一に農家、庭師、一般人なのである」。事実は、農家、庭師、そして一般人一人ひとりが、植物の成長を促し、害虫などから植物を守るという化学的有害物質の使用に関する宣伝に踊らされる必要はないということだ。たとえ宣伝が行われても、人間には自身の分別があり、意志があり、ある種の理性がある。

そこから、人間は、何が正しく、何が誤りで、何が無責任で、何が責任ある行為かを自身で決定できるのである。つまり、何人たりとも何らかの宣伝によって何らかの化学的有害物質を、環境・自然・その動物相と植物相に投入することを強制されることはないのだ。誰もしが、しっかりと責任を全うし、振り回されることなく自ら決断することができるからだ。従って責任、あるいは無責任の所在、それを行行使うことに関しては、誰もしが自ら責任を負っているものであり、無責任な行為が行われた場合、そこに言い訳の余地は全くないのである。

このことは、抗生物質の使用という観点でも同様である。そうした物質を投入する人間はみな犯罪者であり無責任であると言える。つまり農家と野菜・果物などの自然の食品に有害物質を投入する庭師、そして家畜・家禽・その他の動物を抗生物質で苦しめ、それらを肉製品、そして人間のための食料として飼育・肥育する誰もが同じ穴のむじなである。

この点に関しても、誰もが自己の責任を完全に全うし、あるいは完全に無責任に抗生物質と有害物質を使用するか、それによって人間の健康

を危険にさらし、人間を病気にし、更に死に追いやりたいのか否かを自身で決断するのである。基本的に、自然の食品・自然とその動物相・植物相の汚染、その絶滅と、人間が病気になることに第一に責任を負うのは、人間・自然・動物相・植物相にとって有害な化学的成長剤・保護剤と抗生物質の製造者、つまり化学産業と化学メーカーではなく、またその宣伝者でもない。責を負うのは、実に純粋な利潤欲から使用されるこれらの有害化学物質と抗生物質の良心なき利用者と消費者なのである。

彼らが、あらゆる種類の自然食品、また自然とその動物相と植物相に有害物質を無責任かつ犯罪的に投入し、家畜・家禽と有害物質と抗生物質によって、汚染されたその肉が人間の食物となるあらゆる種類の動物・小動物に抗生物質を投与するのだ。

この点においては1844年以来の、近代のはじめ以降、今日に至るまであらゆる事が起きてきたが、これら全てがこのまま今後も続くことになれば、地上に暮らす人類には大変苦難な未来が待ち受けている。

これは、人口過剰に関しても同様である。状況を改善の方向に向けない限り（厳格に管理された出産停止・出産規制によって、世界規模での人口過剰に劇的な抑制を行う）、世界とそこに生きる人類には、世界規模での破壊的で破滅的で無責任な企みによってもたらされる、極めて劣悪な未来が切迫している。将来においてどのような危機が迫り、また地上の人類が見せる様々な形での極度のエゴイズムとその頑迷さと無責任さによって、何がかなりの確率で現実のものとなるか、そして、それに対して予言的、予告的、また可能性の確率計算の形で、何が実行可能かという点では以下のことが言え

る。

今日においてもなお、度し難いいわゆる専門家（彼らは多くの場合、気候変動に関して偽りの主張、嘘、本当の真実の矮小化を行うことで大企業から報酬を受け取り、それによって金銭的な利益を得ている）は、気候変動、またはそれに関連した結果を「気候変動は全てまったく自然で普通の現象だ」などという正気の沙汰ではない主張をして否認している。本当の事実を矮小化する連中と同類なのは、一般市民の中にいる自称物知りや、賢い大口叩きの連中である。彼らは、その愚かさや馬鹿さ加減から現実とその真実を見抜くことができず、無傷の自然とその動物相と植物相、またまったく自然な気候変動、健全な世界、より良く素晴らしく健全な未来という夢心地の幻想の中で漫然と暮らしているのだ。

残念ながら、こうした類の自称物知り連中はあまりに多く、世界中で盲目同然に徘徊している。彼らは、度を越した人口過剰という犯罪的な企みによって、世界とその自然、動物相と植物相、全ての河川湖沼、原生林、その他の森林や牧草地、海、緑地、氷河、景観、そして気候などで引き起こされている全ての破壊・壊滅に関する本当の現実を認識していない。そして、それについては「過去2000年の間だけでも地球には温暖化の時期、あるいは寒冷化の時期が何度もあり、大気中の二酸化炭素が増加することは植物にとって利となる」などといった愚かで馬鹿げた話が繰り出される。もちろん、世界的にみて、古代ローマ帝国時代や中世の平均気温は現在よりも高かった。それは当時も、より暖かい温暖な時代に当たったからである。しかしそれは、今日の気候変動の結果とは比べることなどできないものだ。6000年から7000年前まで遡れば、その当時にもやはり

温暖な時期はあり、その結果として北極地方から広範囲に氷が消えたということがあった。更に過去に遡れば、恐竜とその他の原生动物の時代には、二酸化炭素の割合が現在の4倍から6倍高かったのであり、それが植物界のあらゆる属と種に当然ながら影響を及ぼし、植物が桁外れの成長を見せたということが、今日では科学的に証明可能である。

気候変動と、それに関連する世界規模での変化、食糧危機と水危機、更に自然災害は、現在と将来が抱える大きな問題として論じられなければならない。何故なら、全てを厳密に観察すれば、人口過剰と都市化によって環境がどれほど酷く酷使されているかは明確に分かるからである。何と云っても、人類全体、自然全体とその動物相と植物相、この惑星自身が人類の罪によって引き起こされた気候変動の巻き添えになっているのだ。特に、人口過剰という企みが生んだ極端な結果である浸食とステップ化、それと全く同様に単式農（モノカルチャー）と世界市場で求められる植物の栽培が、生態系全体の暴力的な破壊をもたらしめている。そもそも植物が植えられた場所でまだ育つということ自体、奇跡のようなものだ。しかしこのことは、地球・土壌・自然・森林・水資源の全く良心の呵責も容赦もない搾取によってのみ生じているのであり、これによって、ますます多くの土地が完全に不毛のものとなり、手の着けようがないままに耕作されずに放置されてしまっている。おまけにこのことは特に発展途上国で起きているのだ。発展途上国は、主にあらゆる面で恵まれている無尽蔵のお金を持つ豊かな先進国の大企業によって、容赦なく犯罪的に利用し尽くされ、搾取し尽くされ、略奪し尽くされている。これはとりわけ先進国の大企

業の企みによって貧困化し、病気になる第三世界・発展途上国の人々にみられ、彼らはそれに対して身を守る機会が全くない。何故なら、その国の政府そのものが自国民を困窮と悲惨さの内に、のたれ死にさせることに躊躇がないほどに腐敗しているのが普通だからだ。

原生林の伐採によってますます進む環境汚染、公害、環境破壊は、自然とその動物相と植物相に極めて深刻な事態をもたらし、大規模な破壊と凄まじい気候変動の原因となっている。アマゾン川流域の熱帯雨林の将来を注視すると、良心の呵責もない犯罪的な伐採によって、2030年までにこの熱帯雨林が60%にまで取り返しのつかないほど破壊されることになる。

アジアの原生林をみれば、既に今現在でその3/4が手の着けようがないほどに根こそぎにされ、破壊されてしまっていることが明らかだ。

けれどもアフリカにおいても、伐採による惨状は拡大している。それも極めて深刻な規模である。現在、まだ手付かずのまま残っているのは、原生林の僅か8%に過ぎないのだ。事実は世界中で毎年、スイス国土面積の3倍にあたる面積の原生林が破壊され姿を消しているということであり、スイス国土の面積は山岳地帯を除いて41285平方キロメートルになる。つまり世界規模で見れば、毎年およそ125000平方キロメートルの原生林が破壊され姿を消していると算定されることになる。(論文最後の付録を参照：スイス国土面積)

当然、これは自然とその動物相と植物相、気候、更に地球上に生息する全ての生命体にとって、また生存に不可欠である大気中の酸素含有量にとっても壊滅的な結果を意味する。それというのも、熱帯雨林、

ないしは原生林こそが酸素全体の40%を生産しているという事実があるからだ。

しかし、この事実は見向きもされず、熱帯雨林はためらいもなく、そして犯罪的に下劣な富と利益のために根こそぎにされ破壊され、跡形もなく姿を消しているのである。その結果、毎年膨大な面積の原生林が、鉱業、焼き畑、及び製材業、天然ガス・石油採掘、水力発電所建設などの犠牲になっている。

既に開墾されこれからも開墾され続ける、大規模な原生林ないしは手付かずの熱帯雨林には、バイオ燃料の原料となる様々な植物が植え付けられる。新たに獲得された面積の半分以上がこうした方法で濫用されるのである。

木材伐採機などによって熱帯雨林が姿を消すだけでも、世界の二酸化炭素排出はおよそ25%増加する。

発展途上国であるインドネシアをみると、この国は現在、第三位の二酸化炭素生産国であり、同国の焼き畑農業は現在、7~8億トンの二酸化炭素を排出している。

熱帯地域における、今後の森林消滅による二酸化炭素排出量を全体として考えると、2100年までに1000億~1300億トンの二酸化炭素が生産されることが予想される。計算によれば、伐採された熱帯雨林に代わってサトウキビやアブラヤシが栽培された場合、化石燃料の使用と開墾によって増加する二酸化炭素の排出量を削減して元どおり埋め合わせができるようになるまでに、50年から120年もの期間が必要になる。

代替としてトウモロコシあるいは大豆が栽培された場合には、それどころか400年から1600年もの期間が必要になる。

焼き払われて姿を消すのは、何も熱帯雨林だけではない。灌木や低木

地帯、ステップ、森なども、広範囲にわたって燃やされて姿を消している。原因は落雷の場合もあるが、人間の軽卒な悪ふざけ、無責任さによって引き起こされる灌木火災や森林火災である場合もある。

しかしまた、犯罪的・商業的・投機的な理由から意図的に放火され、焼き払われる灌木・低木地帯、及び森林もますます増えている。これは、確保がますます難しくなっている工場・家屋・住宅地・運動場、そして道路など向けの建設地を作り出すためである。

こういったことは全て、世界規模で更に進行する一方の極度の人口過剰によって、無責任にとられる無節操な措置と、人口過剰に伴う需要にその原因を持つものだ。

自然と、その動物相と植物相を見ると、環境破壊の結果として生物多様性の、衝撃的な激減が起きていることを非難しなければならない。

植物と動物合わせておよそ3200万ある属・種に関していえば、その2/3以上が原生林に生息している。しかし、その多くが、熱帯雨林の犯罪的な伐採と開墾によって、絶滅の危機にさらされているか、あるいは既に絶滅してしまっている。

植物と動物が直面している脅威と絶滅状態を全体的にみれば、自然界に新たに発生している病原菌、そして他の生態系から侵入する異種生物の分布拡大もまた、非常に重要な役割を果たしている。それによって土着の植物・生物種が駆逐され、更に絶滅さえさせられている。

とりわけ将来は、園芸・農業において、土着の雑草種、またグローバル化によって他の国から移入した雑草種が蔓延し、繁茂し、必然的にもはや化学的除草剤では駆除できなく

なり、従って根絶することができなくなるであろう。

そしてその結果こうした雑草が肥沃な土地を荒廃させ、不毛の土地に不良化させるであろう。それは、どの種であろうと雑草というものは、どんな種類の除草剤に対しても耐性を獲得でき、貴重な食用植物を駆逐し、食用植物が必要とする繁茂のための成長・生存空間を奪うためである。これは、言うまでもなく、自然食品の生産に極めて強い負の影響を及ぼす。

既に現在、様々な雑草がもはや根絶不可能になっている。それは、過去数十年の間に世界中で化学除草剤が無責任に投入されたことによって、雑草が進化を遂げて化学的有害物質に適応し根絶やしにすることがもはや不可能になったためだ。この現象は世界的にみて、既に多様な雑草で起きている。

例えば、アメリカの様々な場所で、平方キロメートル[1.196km²]の規模で凄まじい蔓延を見せているオオホナガアオゲイトウ(モンサント・パルマーアマランサス、グリホサート・ブタクサ、ラウンドアップ耐性を持つ怪物植物、新型のハイテク雑草。冥界からやってきた雑草で不死身。南米から移入され、園芸・農業で栽培される植物という植物をことごとく駆逐し、窒息させ、絶滅させてしまう)である。

その他の多くの外来雑草種、土着の雑草種にも同じことがいえ、これらは既に除草剤耐性を有しているか、あるいは将来、耐性を獲得することになる。既にヨーロッパにも、グローバル化によって移入された非常に多くの植物や動物、ありとあらゆる種類の昆虫とその他の小動物が存在している。この数はプレヤールの厳密な情報によれば、全ての属と種にわたって12000と算定される。これらの多くは、意図的なヨー

ロッパへの輸入あるいは意図に反しての移入以降、もはやヨーロッパの生態系でその存在を無視することが不可能であるほど、当地に適応している。そしてこの状態は、将来、グローバル化と、それと関連する植物、そしてあらゆる種類の生物移入によってこのまま継続するであろう。

ヨーロッパに移入された外来植物の多くをみれば、現在においても酷い災厄が生じている。例えば、アメリカ産のアキノキリンソウ(およそ80種あるキク科植物、ほとんどが北米種。一体型で互生する葉、黄金色の総状の花をつける多年草。高さが1メートルにも達する「アキノキリンソウ属」のオオアワダチソウ、セイタカアワダチソウは、乾燥した森や茂みに繁茂し荒れ地に広がる)である。

またアジアからヨーロッパに移入されたオニツリフネソウ(草状のハウセンカ属植物で、ほとんどの場合、アフリカとアジアの熱帯地帯に繁茂。その莢は、接触によって、あるいは種子が熟すと裂けて開き、種子をはじき出す。ハウセンカ、キツリフネと同種)も挙げられる。

更に、北米起源の繁茂力の強いブタクサ(アンブロシア。ギリシャ神話起源の「不死」を意味する。神々に永遠の若さと不死を与えるという食べ物)がある。

ブタクサの繁茂には、歯止めをかけることが現在もはやほぼ不可能である。この他にも、ヨーロッパ(他の国々におけるのと同様)に移入された植物は数多くあり、例えば高さ5メートルにも成長するジャイアント・ホグウィード[Riesen-Bärenklau]は特に説明を要するものである。

というのもこれは、単に厄介な雑草というだけでなく、侵入外来種・侵入帰化種と表現されるべきものだからである。これは繁茂力が強く、他の植物に成長する余地を与えない。

その種子は広範囲に飛散し、多くの場合、特に小川や河川のそばに発芽するが、休閑地や路傍[道ばた]、更に庭にも侵入し、乾燥しすぎていない滋養に富んだ土壤に根を張る。1株がそれぞれ10000~50000個の種子を作り出し種子には水に浮く特性さえある。

ジャイアント・ホグウィード(巨大・ハナウド)の液汁に接触すると、人間の皮膚は重度のやけどを起こす。該当者は、まず皮膚に焼けるような痛みを感じ、その後その箇所は腫れ上がり、水膨れになってはがれることもある。

日光の状態次第で、最も深刻な症状はおよそ2日後に現れる。この植物(ジャイアント・ホグウィード:巨大なハナウド)の液汁は、日光と同時に作用すると二度、熱傷を引き起こす、いわゆるフラノクマリンを含んでいる。つまり、日光が光毒性反応を起こす決定的要因になるのである。

このように、刺激性を持つジャイアント・ホグウィードの液汁と接触した場合には、特に日光を避ける必要がある。症状が治まった後も、日除け対策は続けること。症状に対しては、例えば鎮痛剤、コルチゾンクリームの使用、また冷却するなどの方法で外来治療が行われる。

天候が極端さを増す状況が増えていること、そして、肥沃な土地が失われ、化学物質、人間・動物の排泄物、家庭ゴミ、産業廃棄物、あらゆる種類のプラスチック、抗生物質、化学肥料などによって河川湖沼などの水が激しく汚染されていることも、様々な災害発生の原因になっている。

また、海洋水などの酸性化、化学的殺虫剤・化学的除草剤・ネオニコチノイド・その他のあらゆる有害物質の使用、工場・暖房から排出され

る排気ガス、クルマやその他の内燃機関から排出される排気ガスも生物多様性を危機にさらし、破壊している。

両生類、植物、動物、昆虫、爬虫類、甲虫、水生生物、その他のあらゆる種類の小動物において、全ての属・種で合わせておよそ50000種が毎年姿を消しているのだ。

この状況がこのままの規模で進行すれば、2100年までに全ての生物、すなわち植物、動物、小動物などの属・種の半分が絶滅することも絶対的に起こりうる（専門的な計算によれば、両生類でおよそ30%、哺乳類で24%、鳥類で12%）。

その中には水生生物も含まれるが、この場合（過剰な漁獲に歯止めがかからなければ）、遅くとも2050年には商業漁業が全く不可能になると予想されている。それは、海洋と全ての河川湖沼で全く漁獲がなくなるからである。

事態が本当にそこに至れば、それは15億を越える人々が、その生命の支えとなっている唯一のタンパク質源を奪われることを意味する。これは更に、地球上の人類の大部分もまた、魚とその他の海洋動物・水生生物を栄養分として利用できる可能性を全て失うことを意味する。

第三世界あるいは発展途上国、先進国、そして中進国における環境汚染をみると、増加する原料資源の採掘と急激な工業化の進行によって、汚染はとめどなく、ますます規模を拡大していることが分かる。これは、OECDの国々における近年の環境汚染が減少しているにもかかわらず起きていることである。

これに加えて、環境汚染を減らすといった決定が下された場合でも、全体はそもそも焼け石に水にすらならないという事実がある。というのも、そうした決定が実際に施行され

るまでの時間の間（10年、あるいは20年など）に、世界の人口は毎年およそ1億人ずつ増加していくからだ。

これは、決定が施行された時には、その決定は既にとうの昔に時代遅れのものになっており、問題そのものの規模は、決定が下されたその当時の何倍にも膨れあがっていることを意味する。あらゆる種類の自然死と不自然死、また現在の世界人口の増加を考えて、毎年平均で人口が1億人増加することを前提とすると、2050年までの今後35年間で、過剰状態にある人口は更におよそ35億人増加する。それだけの人間が地球上に溢れ、地球を苦しめるのである。

このように、2015年における地球上の人類の総数が、実際には85億人以上と算定すべきであるとすると（これはプレイヤー人の正確な計算に従ったもので、地球人統計家の誤った計算と主張とは異なる。地球人統計家は、2015年の地球上人口はおよそ74億人に過ぎないという前提を出発点としており、2050年の地球上人口は僅か90億人になると信じている）、2050年にはおよそ115～120億人が地球上に過剰にひしめき合うことになり、その無節操な企てによって、自然全体、動物相と植物相、気候、海洋と河川湖沼、大地、地球そのもの、更に人類の既に非常に悪化した道徳的な人生の質に、更に多大な災厄をもたらすことになる。

そしてこれは、本当の災厄に対する取り組みが行われず、単に対症療法のみが行われているからだ。そもそも、この災厄全体の原因に対して、すなわち拡大する一方の人口過剰に対して執拗に取り組みなければならなく進行しており、世界的な出産

規制という歯止めもかけられていない。世界規模での惨状と災害の全体像に関しては、特に、世界貿易機関（WTO）によって押し進められた貿易障壁撤廃の結果、多くの国で、環境保護・消費者保護に関する法律が弱体化させられることになったことを指摘しなくてはならない。

この結果に苦しんでいるのは、自然とその動物相と植物相だけではない。気候と地球という惑星全体、そしてもちろん人類も苦しんでいるのである。何故なら、人類の健康が途方もなく損なわれているからだ。

特に決定的な要素となっているのが大気汚染である。このために、世界中で毎年400万人もの人が亡くなっている。更に、やはり世界中で毎年1600万人もの人が、化学物質と、特に細菌で汚染された水を飲み、水と同様に汚染された食品を食べることによって引き起こされる病気で亡くなっていることも悲しむべきことである。飲料水をめぐる状況は、非常に厄介で矛盾したものになるろう。

というのも、水資源は、干ばつが続くことでますます枯渇していく一方、多くの場所で、豪雨の発生により、園芸産業や農業などで使われている化学肥料が流れ出して飲料水が汚染されるため、何十万という人々が飲料水に関して大きな不安を抱えるという事態になっているからだ。

同時に、有害な藻類の華も、凄まじい規模で発生している。飲料水は、土壌と河川湖沼の化学物質による様々な汚染によって有毒化される。

特に汚染原因となっているのは、園芸や農業、あらゆる種類の植栽農園[:ブロッカー]で使われているリンや窒素などの化学肥料、化学的殺虫剤、化学的除草剤、ネオニコチノイドなどである。

化学物質は当然ながら地下水にも流れ込み、それによって再び飲料水

循環にも入り込む。これらの化学物質から生じる影響は、とりわけ暖かい気候の場合に強くなり、飲料水源としても使われる自然の水域では、シアノバクテリア（藍色細菌）、いわゆる有害藻類の華が爆発的に増殖することになる。これは、視覚的には水が青緑色に変色し、水面が緑がかった藻の絨毯に覆われ、縞模様に見えるという形で現れる。

このバクテリアの発生は、人間にとっては差し迫った危険を産み出す。何故なら、これらのバクテリアは様々な毒素を作り出し、それが当然ながら水を汚染するため、その水を飲む、あるいは単に歯磨きや料理に使っただけで下痢や嘔吐・吐き気の原因となり、また肝臓と腎臓に危険な障害を引き起こされるからだ。

この水を加熱したり、沸騰させたりすると毒素の濃度は更に高まる。

従って、場合によっては、加熱あるいは沸騰させることなく水を使用した場合よりも、更に危険な状況が生じるようになってしまう。

世界中で、ゴミの排出が途方もなく制御不能なほどに増加していることも悲しむべきことだ。特に先進国では、どのみち環境を汚染し、病気を撒き散らす広大なゴミ処理場のための場所を、見つけることがますます困難になっている一方で、排出されるあらゆる種類のゴミを適切な方法で有意義に加工するための工夫には、ほとんど手が尽くされていない。

ゴミを適切な方法で加工し尽くすとは、灰の形で処理できるものは全て焼却し、無害化し、有益な方法によって何らかの形態で再利用が可能になるようにすることを意味する。つまり、再利用可能なものは全てリサイクルし加工し、新たな製品として再生させるのである。ところが、一方でその代わりに起きているのは、世界中で排出が途方もなく増加

するばかりのゴミが、環境全体の景観を損ねるという現象だ。

つまり、無責任な市民がゴミを畑や河川湖沼、海、森に廃棄するからであり、それによって自然、動物相と植物相、更に生態系全体が危機にさらされているのである。他方、行政や政府、更にゴミ処理会社も、ゴミ処理に関して犯罪的な、そして無責任な行動をとっている。

すなわち、山のようなゴミを、自国内での大量ゴミの発生を既にコントロールできない、貧しい国、中進国や発展途上国に船で送りつけるのだ。事実は、これらの国々では、発生するゴミの内、収集されるものはごく僅かに過ぎないということだ。

残りの莫大な量のゴミは、道路、畑、牧草地、現地の河川湖沼、海などにただ投棄され、その場所と環境全体を汚染し毒まみれにするのである。

なかんずく、プラスチックとその他の合成樹脂廃棄物の及ぼす問題は極めて深刻だ。何故なら、これらは種類によっては100年から700年経たないと完全に分解されないからである。特にこれらの種類のゴミは、現地の河川湖沼や海に集まり、いくつかの海洋吹送流の渦の地域においては、現在既に何平方キロメートルにもわたって大規模に水面を覆い尽くす事態になっている。

それだけではない。プラスチックとその他の合成樹脂廃棄物は、河川湖沼や海の波の動きと太陽紫外線によって、時間の経過とともに粉碎され、微細なパウダー状になり、魚とその他の水生生物のエサに入り込み、それによってまた、魚とその他の水生生物を食べる人間の食物連鎖にも入り込むのである。また、どのような種類の環境汚染にせよ、それは河川湖沼中、陸上、また海洋中における死のゾーンをあっという間に拡大させるだけでなく、生物多様性

にとって極めて重要な意味を持つ肥沃な地表環境を毒素で汚染し破壊するものだという事も指摘しなければならない。

そのような死のゾーン（途方もない環境汚染と、農業用地への硝酸塩とリンなどの過剰施肥によって生まれた）は、現在、世界中で3200平方キロメートルを越える規模に広がっている。更に、これらの肥料は、小川や河川、湖沼や海洋に流れ込んで、大規模な藻類の絨毯を発生させ、それによって水生動物界や水生植物界に甚大な被害をもたらし、あるいは死滅させるといった深刻な事態を引き起こしている。水中で植物や水生動物などが徐々に死滅すると、その死骸の分解のためにバクテリアが必要となる。

これらのバクテリアは、自身の生存のために大量の酸素を必要とするため、その他の水生動物や水生植物のための酸素が不足することになる。従って、魚類も甲殻類も貝類も、あるいは他の水生小動物も生きていくことが不可能になってしまう。

いわんや自然の水生植物にしても同様である。破壊力を持つ特定の藻類を除いて… また、こうした死のゾーンは、特に暖かい・暑い季節に出現することも指摘しなければならない。すなわち、春・夏・秋である。

何故なら通常、これらの季節においては、嵐で水が波立つことがないからである。嵐は普通、水が嵐の来ない季節よりも多くの酸素で満たされるという結果をもたらすのだ。

地上の人類自身による壊滅的な環境汚染と環境破壊の他、常軌を逸した人口過剰がもたらした無責任なあらゆる企みの結果として、地球と全ての生命体は気候変動による損害を被っている。この理由からだけでも、人類の未来は非常に暗くみえる。そして、既に述べたとおり、その責を

負っているのは地上の人類自身なのだ。

何故ならCO₂の排出は、排ガスを大量に吐き出すあらゆる種類の作業用機械、林業、工場、暖房、産業、石炭、そしてその他の排ガスを排出する発電所や農業、何十億という個人の家庭、自動車、鉄道のディーゼル機関車、航空機そして、船舶、くだらない無責任なモータースポーツなどによって引き起こされた二酸化炭素の放出によって、途方もなく上昇したからである。これらが、自然とその動物相と植物相、人間の健康を損なう様々な要素に加えて、気候変動まで引き起こしたのである。

事実は、地球上に暮らす人口が増加するにつれ、CO₂の排出量も増加し続けるということである。それも、これは自称専門家による愚かで誤った予想をはるかに上回る規模で進行する。これら自称専門家の馬鹿げた主張が常に完全に間違っているのは、彼らとその粗雑な計算の際に、毎年1億人の規模で拡大し続ける人口過剰を考慮に入れないからだ。

必要なのは実状に対応した徹底的な対策であり、これが世界中で実施される国家管理下での出産規制の形態などで実施されれば、それこそが唯一、地上の人口増加に対する歯止めとして機能するのであるが、そうした対策もまたとられていない。

この点における無策が続いているため、CO₂の排出量は引き続き急激な伸びを見せるであろうし、また今後15年の間におそらくは倍増するであろう。

それによって、気候が原因となる自然災害が更に多く、更に頻繁に起きることは不可避となり、自然そのものも、また人間の作り上げたものも、途方もない規模で破壊されるであろう。その際に無数の人命が失われることも、前述したとおり二酸化炭素の排出量が更に増加を続けるこ

と同様に、不可避となる。

それは、人口増加に伴って人間が消費するエネルギーもまた増加の途を辿るために、増加し続けるエネルギー消費が、更に途方もない規模に膨れあがるからである。これはもちろん、先進国でのみ起きるわけではない。人口超過状態にある中進国、中国とインドでも起きることである。これら両国を合わせただけでも、人口はおよそ30億人にもものぼる。これらの国々で必要となる経済的なエネルギー需要を更に考慮すれば、その規模は途方もないものになる。

そして、アルミ、ガラス、鉄鋼、セメントなどの生産のための発電に、石炭と石油で稼働する発電所が排出する有害な環境破壊物質を考えれば、これに対する責任を負うことはもはや不可能であり、同様に地球上の全人類が必要とする全ての物資を生産することも、もはや不可能である。

この点においても、二酸化炭素の排出は途方もない規模で行われているのであり、これは中進国だけでなく、先進国においても同様である。というのも、より豊かな国、より貧しい国のどちらにおいても、人口過剰はコントロール不能なまま常に拡大しており、それによって消費もまた拡大しているからだ。

とりわけ、全ての中進国と発展途上国をみれば、これらの国においては先進国に比しての遅れを取り戻したいという非常に大きな需要があるのが分かる。何故なら、彼らにはどのような発展の形態においても豊かな国々に後れをとりたくないという気持ちがあり、それゆえ増大する消費支出を正当化し、豊かな先進国でみられるのと同様の高い生活水準を必死に手に入れようとしているからだ。従って、今後も、増加する一方の乗用車からのCO₂排出は増え続

け、人口過剰が拡大するにつれて、環境汚染、また自然とその動物相と植物相の破壊も、拡大を続けるであろう。

このように、将来、CO₂の排出は極めて急激に増加する。そしてそれは、引き続き拡大する一方の人口過剰に応じて進行していく。世界の海洋は、既にCO₂でほぼ飽和状態にあるため、そこで吸収される二酸化炭素はごく僅かである。現在のところは、人類が排出したCO₂、1トン当たり、大気中に達するのはその半分強であり、残りは海洋に取り込まれ吸収されている。

しかしながら、世界の海洋にしる陸上の水域にしる、その水は、既に取り込まれたCO₂で飽和状態にあり、更に取り込める二酸化炭素の量はどんどん少なくなっている。

すなわちこれは、それによって大気にかかる負荷が更に増え、過剰負荷の状態になっているということで大気が、全ての生命体の健康にとって有害なものになっていることを意味する。更に、ここに気候変動による影響も加わる。というのも、河川湖沼と海洋の表面水の温度が上昇を続けていることにより、水循環の速度が落ち、それによって水中深部に沈下する表面水の量が減少しているからだ。

この結果、二酸化炭素が水中深部に運ばれることがなくなり、栄養分に富んだ水が上昇してくることもなくなる。これにより、当然ながら植物性プランクトンが得られる栄養分が減少するため、世界の海洋における酸素の産出に多大なマイナスの影響が及ぶ。

もちろん、魚の生息数やその他の水生生物にも悪影響が出ることになる。それらの食物連鎖にはプランクトンが非常に根源的な重要性を有しているからである。

二酸化炭素の他に、地球の人類は、メタンや笑気（一酸化二窒素の俗称）などの気体も排出している。これらの気体は大気を満たし有毒にし、当然ながら地球温暖化にも寄与している。言うまでもなく、エアロゾールも挙げなければならない。これは特殊な微細の煤粒子で、一番下の大気層（対流圏）に蓄積され気候を害する。

人間が発する熱の大部分も、廃熱として大気と気候に非常に有害なものである。人間からの廃熱は、そのごく僅かしか宇宙に放射されず、その大部分が近接する周囲の大気に残って悪影響を及ぼし、それによって気候変動を急速に押し進めることにもなるからだ。

当然ながら気候変動は、ゆっくりと少しずつ進行するのではない。

フィードバックによって変動の速度は常にどんどん上がっていくのである。こうしたこと全てによって生じるのは、特に気温が上昇するという結果である。例えば、これによってアマゾン川から絶え間なく蒸発する水分量が、通常の場合よりも増えることになる。

こうしたことはもちろん熱帯雨林にも悪影響を及ぼし、熱帯雨林が枯れるといった事態につながることは避けられない（それだけでなく原生林の開拓も通じて）。そして、二酸化炭素排出も、原生林が枯れることに加え、枯れた樹木や植物が腐敗し分解されることで、更に増加するのである。

これは、土壌、樹木、植物が乾ききってしまうことにもつながる。その結果、何らかの自然な原因、あるいは人為的な要素によって火災が発生し、そこから更に途方もない量のCO₂が排出されることになるのである。CO₂の増加速度を更に高める要因は他にもある。

それは、温暖化によって山岳永久

凍土とその他の地域の永久凍土が広範囲にわたって解けることである。

永久凍土の中だけでも、1.6兆トン（16000億トン）を超える二酸化炭素が貯蔵されているのだ。産業化が始まって以降、地球の人類によって、まさに1100億トンものCO₂が放出された。

永久凍土にはCO₂の他、膨大な量のメタンガスが凝固している。メタンガスの作用は二酸化炭素のおよそ30倍強いことを考えれば、メタンガスが気候に及ぼす影響はCO₂によるものよりも更に悪くなることになる。

膨大な量のメタンガスは、海底の凍結した堆積物の中にも封じ込まれており、これは地面の動きと熱などによって解放され大気圏に到達する。このメタンガスが、海洋水温度の上昇によって解けだせば、世界の平均気温は更に急激に変化し7度から8度上昇することになる。

しかしこれだけではない。というのも、メタンガスは、牛、豚、家禽などの何百万頭という用畜（有用動物）からも途方もない量が産出されているからだ。これらの用畜（有用動物）は、人間とそのペットを肉で扶養するために肉食生産などに屠殺される家畜であり、その数は、食肉需要の増大に伴って常に増加している。

現在の時点で、地球の人類（ペットを除く）は毎年およそ3億6000万トンの肉製品を食べているが、この消費量は、2050年までに、およそ5億3000万トンになると見込まれる。

否定しようのない事実、急激に拡大を続ける人口過剰によって、二酸化炭素の排出がとめどなく増え続けていることである。これは、人口過剰が原因となって生じた様々な問題、例えば、自動車、船舶、航空機

やその他の移動手段など、あらゆる種類の原動機付き車両の利用が増えたことによる結果である。

また同時に、途方もない量のCO₂を排出するあらゆる種類の作業機械の使用も増え、更に数えきれないほどのエンジン付きスポーツ車両も、膨大な量の二酸化炭素を発生させている。

その一方で、食肉の生産のために、何百万頭の家畜、家禽、小動物から膨大な量のメタンが発生している。

そしてこの状態は、現在だけでなく、将来においても継続するのである。実質的にみてこの状態は、既に何十年も前から生じており、人口過剰のとめどない拡大とその常軌を逸した状況、また犯罪的な企みがはじまって以降、ずっと続いているのだ。

これは、化学物質、多くの河川湖沼の無責任な搾取と汚染と破壊、戦争、あらゆる種類の天然資源乱掘、技術の発展、環境汚染、環境破壊、自然とその動物相と植物相の破壊などとの関連によって生じている。

これら全てから不可避に生じる結果（事象は何千にもわたり、全てを列挙することはとても不可能だが）は、人口過剰から必然的に生じた、そしてこれからも生じる無節操で途方もない極めて犯罪的な企みによって、気候もまた壊滅的な打撃を受けるということであり、従って、全世界に影響を及ぼす気候変動が、続々と自然災害をもたらすということである。

これにより、自然とその動物相と植物相には途方もない変化が生じる。その変化は生態系全体を変貌させてしまい、生態系の内部に想像を絶する破壊と壊滅を引き起こすことになる。

更に、人類のあり方そのものにも、破滅的な影響がますます強く表れている。これは特に、増加の一途を辿

る失業、難民・外国人・人間の存在・隣人・宗教に対する憎悪、あるいはエネルギー不足、大量の難民の発生、食料難、新種の病気や伝染病、水不足、生活圏の不足、組織犯罪や犯罪的行為の増加という形で姿を見せている。

人々の間では無関心がますます激しさを増し、困窮と悲惨、敵意と悪意も膨れあがる一方である。そして人命に対する敬意、関心はますます失われ、生命の尊厳と価値は更にはないがしろにされるばかりである。その結果、人生に対する倦怠と怯懦ゆえに自殺する人も増え、不安、嫉妬、憎悪、権力欲、金銭欲、争い、精神病的・偏執狂的発作と無節操ゆえに殺害されたり、あるいはそれに悩まされたりする人も増えている。

このような形で、家族内での諍いや、家族内での死に至る悲劇、また自殺も増え、精神病質・偏執狂的な嫉妬や憎悪・復讐欲・支配欲に駆られた者、勝るとも劣らず精神病質・偏執狂的な宗教的分派に属する者や、精神病質・偏執狂的な傾向を持つその他の者（男女）が、理性を失って殺人行為に走ることも増える。

多くのことが無節操に行われ、大量殺人は増加の一途を辿り、人々に激しい苦しみをもたらす。それだけではない。何故なら将来においては、悪質な争い、殺りく、戦争、テロ行為、内戦が増えることが記録されなければならないだろうからだ。それらは様々な傾向を持った軍隊、国家権力、テロ組織によって行われる（常に新たな犯罪的な分派を様々な国で生み出すヒュドラのような… | Sはその一例である）。

こうした事態に対する軍隊や国家の責任ある立場にある者の取り組みは、あくまで不十分で手ぬるいものに過ぎない。

これらのグループの内、一つが制

圧され殲滅されたとしても、それに代わってレルネーのヒュドラがそうだったように、新たな二つの殺人的分派が生まれ、最悪の形で猛威をふるい、人殺しをし、破壊し、壊滅させるという結果になる。

また、独裁者、支配欲に駆られた者、政治家、狂信的宗教者や狂信的宗教分派や、あるいはまた医薬品・食糧・食品・水不足が引き金となって起こる戦争やテロ行為も挙げなければならぬ。更に、あらゆる形態での悪質な人種憎悪も極端になり、増え広がっている。この状況には特に、様々な独裁国家、人間を敵視する国家から逃れてきた四方八方に広がる一方の難民の存在によって、更に拍車がかかっている。

人種に対するむき出しのテロ・戦争は、悪質な人種憎悪グループと人種差別主義組織の存在によって2015年現在よりも非常に激しくなり、様々な形態での発生が危惧されるものとなる。それを担うのは、民間人によるグループや、同様の方向性を持つ新たな組織であろう。

例えば、20世紀以降ヨーロッパ、ロシア、アメリカ、また他の様々な国において悪質な殺人的活動を展開し猛威をふるったネオナチ、アーリアン・ブラザーフッド、アーリアン・ネイションズや、19世紀以降のアメリカで数えきれないほどの人種差別主義に基づく殺人を犯したクー・クラックス・クランなどの同類だ。

人間が作り上げたものに対する破壊も、今後更に増えていく。それは人間自身の墮落、悪意、気まぐれ、そしてまた増加する一方の自然災害にも起因する。加えて、憎悪、嫉妬、無関心、孤立も、人々の間に更に拡大していくであろう。

人命の価値の軽視も更に酷くなり、その結果、人命は容赦も節度も

なく、悪意と気まぐれに翻弄されて傷つけられ、奪われるものとなる。

あらゆる貪欲、悪徳、病的欲望も、殺人、故殺と同じように、家族内や学校、仲間内で増加していく。

そこで見られるのは、宗教的・狂信的な分派主義と精神病質・偏執狂的な無節操であろう。同様に、思考面・感情面・精神面での異常、洗脳的な要素、現実離れした態度、破廉恥な態度も出現する。

さて、正気ではない自称物知り連中や専門家、無責任な科学者らは、良心のかけらもない大企業から報酬をもらうのと引き換えに、この明白な事実を今日においてもなお否定し続けているが、これまでの、そしてこれからも凄まじい規模で増加し続ける二酸化炭素の排出が、世界規模での温暖化の原因であり、気温は2100年までに6度、あるいは状況次第では8度も上昇し得ることは疑問の余地のない事実である。

そして、大気温が1度上昇するごとに、熱帯のハリケーンは最大で35%増加するという事実である。しかしそれだけではない。温暖化の影響は、北極地方と南極地方にも及ぶからだ。

結果として、北極地方と南極地方の氷層厚は融解によって減少する。

同じ現象は世界中の山岳氷河でも起きている。気候の温暖化がこれまでと同様の規模で継続すれば（人口過剰の結果としてあらゆる点で生じる常軌を逸した事態も影響して）、早くも25年後には夏の間、北極地方から氷が消えることもありうる。

かつては最大で700万平方キロメートルあった北極地方の氷面が、現在では僅か300万平方キロメートルほどしかないことを考えれば、ここから全体として現れるのは暗い将来像である。つまり、地球の温暖化が更に進むということだ。何故な

ら、氷面積が小さくなれば、反射される日射も少なくなるという事実があるからである。気候変動と氷融解がもたらす更なる影響は、海面の上昇である。

現在、これは年におよそ4.5mmの規模で起きている。

従って、2100年までに、海面がメートル単位で上昇するに違いないことは容易に計算できる。計算によれば、海面上昇は、そのおよそ45%が内陸氷の融解によって、およそ55%が温暖化とそれによって生じる海水の膨張によって起きるとみられる。海に関しては、北海沿岸諸国では暴風による、より大きな高潮が発生するであろうことも指摘しなければならない。

何故なら21世紀末までに、高潮はこれまでよりも1.5m超高くなるであろうからだ。

海面が55~60cm高くなるだけでも、水辺の森、浅瀬水域、塩沼などの生物の貴重な生息圏が破壊される。もし北海とバルト海の海面が1m上昇すれば、沿岸部と内陸部がおよそ15000平方キロメートルにわたって水没することになる。そうなれば、現在およそ400万人が暮らし利用している土地の多くが、水面下になってしまう。

更に、ヨーロッパに迫る別の脅威のシナリオは、大気圏の温暖化によってメキシコ湾流が消滅し、ヨーロッパに新たな氷河期が突如として到来するというものだ。これは現在のところ、まだ現実味を帯びていないが、状況によっては考慮されなければならない。

気候変動は、この地球という惑星そのものにも地質学的変化を引き起こし、その変化はますます増加し、そして激しさを増している。永久凍土の融解や豪雨などによる山崩れ、土砂崩れ、土石流などだ。地表と海底ではマントルに亀裂が生じ、かつ

また大規模なマントルの変位も起きている。加えて、絶えずより強烈になる原始世界のようなハリケーンや津波が大地に襲いかかり、自然やまた人間の手になるあらゆる種類の建造物を壊滅させ、何千という人命を奪うのである。太古からの自然の法則は崩壊し、新たな形態へと劇的な変化を遂げる。

そして、地質・自然に生じる新たな変化に、人類は適応せざるを得ない。それができなければ、滅亡するしかないのだ。こうした適応が必要であることは、全世界での出産停止と、そこから当然生じる世界規模での出産規制が必要であることも意味する。同時に、自然・動物相・植物相・気候を破壊する、世界中で展開されている人間の手によるあらゆる種類の無節操な企みに、最終的な終止符を打たなければならないことも意味する。

これに加え、もうひとつ別のシナリオもある。すなわち、地球規模での温暖化によって、2100年までに、酷い干ばつが生じるということだ。更に、アマゾン川流域の熱帯雨林もこれに巻き込まれ、最大で75%破壊されることになる。

これは、人口過剰に伴う無節操な企みが引き起こしている現在の破壊プロセス全体が、このまま進行した場合に避けられないことである。

しかし、地球上の人類とその政府、また責任を負う全ての人間が、世界の人口増に歯止めをかけるために不可欠であるはずの措置、すなわち世界規模で目的に合った出産停止と断固たる出産規制の措置を実施しないであろうことは、既に今の時点で明らかだ。

アマゾン川流域の破壊に関しても同様である。この場合は、破壊された熱帯雨林が草地・灌木のサバンナ地帯になれば儲けもので、さもなけ

れば死んだ荒地地になって終わりである。

しかしそれだけではない。ヨーロッパ南部とアメリカ南西部、アジア南西部、サハラ砂漠以南のアフリカ、中東、更にオーストラリアのかなりの部分も、将来、破壊的な乾期に入る可能性があるからだ。

この乾期は、その地域の気候に、非常に強いマイナスの影響を与えることになる。灌木地帯は必然的に更に拡大し、その規模はこれまで知られていたものを全て超えるものになるだろう。この新たな乾期の到来は、いたるところで凄まじい規模で収穫の損害をもたらす、これはもはや変えようのないものになろう。

また同時に、南米西部、ニュージーランド、オーストラリア北部、中国東部などにおいて、尋常でない規模の洪水の危険も増す。その一方、ヨーロッパ北部、カナダ、南米などの気候が温暖な地域では、より規模の大きい有用な農地が誕生する。これは気候変動の結果生じることで、当然ながら収穫量の増加をもたらす。

CO₂の量が増えれば、種々の食用植物や野生植物がより良く、より早く成長するようになるからである。しかし、これと同時に、その他の外来の動物・鳥類、あらゆる種類の陸生・水生小動物が、そこに適応し定住することにもなる。これは犯罪的なグローバル化による移入だけでなく、気候条件によって直接生じる渡来の結果でもある。

現在、そして将来においても、気候変動は貧しい国々に極めて大きな損害と破壊をもたらす。しかし先進国にしても無傷ではいられない。総括的に世界全体を見れば、気候変動とその影響、また自然災害による損害は、何千兆スイスフランの規模にのぼる。

世界規模での海面上昇だけをみて

も、その上昇がたとえ0.5m程度であったとしても、海岸沿いにあるおよそ140もの百万都市が危機にさらされることになる。

これは、途方もない規模の人間の業績と価値ある財産が、海水上昇によって破壊されることを意味する。

損害の規模は、ここでもやはり何千兆スイスフランにのぼるに違いない。しかし、予想されるシナリオはこれで終わらない。例えば、モルジブのおよそ1200の島々は、海拔が最高でも2.4mしかないので、これらの島々のように国がそっくりそのまま地上から姿を消すことさえ起こりうる。たとえ、海面の上昇が僅か0.5mであっても（これはまた高い確率で実現するだろうが）、これら島々のほとんどの部分が居住不能になるということの意味する。

更に、温暖化によって、海水が内陸部にどんどん入り込んでくることも指摘しなければならぬ。その結果、食糧の栽培に使われる土壌にも、人間の飲料水と農耕地の灌漑用水かんがいとして使われる、生存に不可欠な地下水にも、海水が入り込んでくることになる。

気候変動による影響に最も苦しむのは、既に述べたとおり、本当に貧しい国々と、そこに暮らす人々である。しかし、彼らこそ温暖化の全体にはごく僅かしか関わらないのであるが、これからもそれは変わらないだろう。

天然資源に関していえば、これらの国々で天然資源を略奪し尽くしているのは先進国の大企業であり、これら貧しい国に暮らす人々は、そもそも自国の天然資源を使える立場にあるとしても、それにほとんど、あるいは全く関わっていないのだ。

それだけではない。気候変動の結果からだけでも既に貧しい国々には解決することがもはや不可能な問題が発生している。避けることのでき

ない干ばつの到来に関して言えば、ただでさえ痩せた耕地はこれで干上がり、完全に不毛の土地となる。

その結果、既に述べたとおり、食料難も更に拡大することになるのだ。また、雨が降らないために水源が干上がり、人間と自然、その動物相と植物相が極度の水不足に直面することになる。この結果、人間にとっても動物相と植物相にとっても、いよいよますます四方八方に死が広がることになる。

干ばつは河川湖沼こしゅうにも損害を与え、その水位が低下すれば、当然、船舶の運行にも支障が出る。水力発電も同様である。何といても自然を源とする水は、その半分をはるかに超える量がエネルギー経済に使われているのだ。特に、設備の冷却のために川の水を必要とする原子力発電所がその例である。

つまり、将来において、これらの発電所の運転を早期に停止することは、理性的な理由から必要になるだけではない。水不足という事態のために、こうした発電所のために水を無駄に使うことがもはや許されなくなるからである。しかしこれと対照的に、人口過剰が何のコントロールもなく拡大の一途を辿ることとの関連で、エアコン用電力消費、そして家庭・農業・産業向けの日々の電力消費は、増加する一方である。

また憂うべきは今後、訪れる暑さと干ばつが、ヨーロッパの一部の地方に収穫の減少をもたらすことである。それに対してしかしながら水分をごく僅かしか必要とせず、また暑さに対して現在の品種に比べて、より耐性を持つ新たな穀物種が栽培されるために、他の地方の農業には良好で、それどころか収穫の増加さえ予想することができる。ヨーロッパの一部地域では、40度を超える暑さになる頻度がより増え、それが人々に深刻な問題をもたらすことに

なる。

森林に関しては、温暖化が進むことでトウヒが死ぬことになる。何故ならこの樹木種はより寒冷な気候が必要だからである。この結果、カエデ、ブナ、カシなどの樹木種と、暖かい乾燥した気候に耐性のある南方の樹木種が、北方の針葉樹に代わって増えてくることになるだろう。

つまりヨーロッパ全体において、気候変動の結果、土着の樹木の多くが姿を消すことになる。しかしその際、既に述べたとおりヨーロッパに定着するヨーロッパ南部と、世界の他の地域からの種は増える一方であり、これは動物、昆虫、鳥類、水生生物とあらゆる種類の小動物にも当てはまる。とりわけ、これまでは春・夏・秋に限って姿を現していた属・種が、ヨーロッパ中部と北部に最終的に定住し、その姿は年中みられるものになるのである。

つまり、ヨーロッパ全体で、冬の気候が現在よりもはるかに穏やかで湿度の高いものになることは明らかだ。この結果、霜や寒気が訪れる時期が激減することも相まって、当然ながらいたるところで暖房需要も減少することになる。しかしそれにもかかわらず、冬期には激しい嵐や大洪水を起こす降雨が発生するようになる。

それによって河川の氾濫、豪雨による土石流、洪水が頻繁に起こり、災厄と甚大なる破壊を引き起こし、人々に多くの苦悩、困窮、不幸をもたらすだろう。降霜と降雪は減少の一途を辿って気候変動により著しく少なくなり、特に標高900mを下回る土地がその変化に見舞われると予想される。山岳地帯から雪が無くなるために、これは当然、冬期スポーツ施設の運営事業者にとっても打撃となり、事業者を倒産に追い込むことになるだろう。

スキー場のゲレンデの営業は、愚

かなことに人口雪を使ってしばらく続くが、これには当然、途方もないエネルギーと水が必要になる。最終的にはこれらも調達が可能となり、この浪費は最終的に断念せざるを得ないか、あるいは禁止されることになるだろう。

干ばつによる大災害は、それに見舞われた国々に途方もない変化を引き起こし、深刻な水不足を常態化させるが、ヨーロッパ中部・北部に関して言えば、気候変動による影響は、干ばつという点では比較的少ないものになるだろう。

しかしそれにも関わらず、ヨーロッパ全体では、干ばつと水不足に苦しむことから逃れられない。その一方で、原始世界の様な嵐や悪天候、大規模な河川の氾濫が増加し、大規模な災害、損害、破壊を引き起こし、多くの人命が失われることになる。当然、年の平均気温も長期的に上昇し、2100年までには4℃まで、場合によっては7℃まで上昇することも考えなければならない。

これは、人口過剰の更に途方もない拡大と、人口過剰に対する無節操な措置によって、自然とその動物相と植物相の破壊、気候変動がどの程度進行するかによる。しかし確実に言えるのは、ヨーロッパ全体で夏が更に暑く、そして乾燥したものになり、その結果、夏の気温が日陰でも30℃、あるいはそれ以上に上昇するということである。

これは、そのような高温に慣れていないヨーロッパ中部・北部に住む人々にとって命に関わる問題が生じることを意味する。オゾンとスモッグによって気管支や肺が危険なダメージを受け、熱中症や心筋梗塞による死亡率も上昇するからである。

温暖化の進行の結果、ヨーロッパにおいては将来、気温が1℃上昇するごとに死亡率が最大で6%まで増

加することを予測しておかなければならない。

これはまさに、ヨーロッパ中部・北部の人々が酷暑に慣れていないためでもある。このヨーロッパ全体における気温上昇は、気候帯の移動を伴う。更に、特にマラリアをはじめとした熱帯性の疾病や深刻な伝染病など、南の国々からやってくる新たな疾病や伝染病の発生にもつながる。

しかし、将来、ヨーロッパ人の健康に害を及ぼすことになるのは夏の気候ばかりではない。春と秋も大きな犠牲を強いることになる。例えば、初夏にはダニに噛まれ、ボレリア感染症や髄膜炎を引き起こしたりする。また、強烈さを増す日光によって、皮膚がんも猛威をふるう。これは夏に限らず、春と秋も同様である。

更に気候変動によって、自然の食品に使われる化学有害物質も、これまでは知られていなかった変化を引き起こすことになり、その結果、アレルギーや胃腸の病気に苦しむ人が増加する。

氷河に目を転じると、今後さし迫っているヒマラヤ氷河の融解が起きるだけでも、15億以上の人々に甚大な被害が及ぶことを指摘しなければならない。何故なら水不足は恐ろしい結果を伴って犠牲を強いるからである。大規模な干ばつが生じれば、インドだけに限ってみても痩せた土地で農業が生き残ることが極めて困難になる。

これは人口のおよそ65~75%を直撃するであろう。また中国北部(その他の国々においても)の、内陸部は干上がり荒廃するだろう。更にまた砂漠同様の地域の範囲はなお一層拡大する。このように、将来、干ばつと、河川の破壊的な氾濫、あらゆる種類の異常気象と地震によって、アフリカ、中央アジア、東南アジアの多くの国々が国家の崩壊に追

い込まれるであろう。

今日、既に大量の難民が世界中に溢れているが(これは1950年代、更にその後の時代に既に予言されていた事態である)、実は大規模な民族移動、民族避難は、これからはじまるのである。難民を受け入れる国々にとって、1年あたりの難民の数は現在まだ対応可能なレベルにあるが、35~50年後には、それはおよそ3~3.5億人になる。

これは気候変動とそれがもたらす壊滅的な結果と、また政治・軍事・宗教・テロによる騒乱と陰謀がもたらした厄介な負の影響により、故郷を追われ、世界中で異国に新たな避難場所を探し求める人々である。

こうした人々の行き先は(現在もそうであるとおりに)、今後も特にヨーロッパになる。この大量の難民は、世界中とりわけアフリカとアラブ諸国から大きなボロボロの船や、使い古された木製やゴム製のボートに乗ってイタリアやギリシャの島々、あるいは陸地にたどり着く。ただしそれは、船やボートがその前に転覆して海に投げ出されたり、あるいは密航斡旋業者によって海に投げ捨てられたりして、溺死しなかった人々である。つまり、今後も難民の流れはより長くなり、より多くなる。

すなわちその流れは(既に現在でもそうであるように)更に激しく広範囲なものになり、コントロール不能なまでに増大する。それも、難民の出身国はアフリカ大陸だけでなく、バルカン諸国、東欧諸国、南米・アジア・中近東の様々な国にのぼる。

難民が殺到し移住する国々では、それによって生じる難民の流れの問題に官庁、政治家、援助組織、監視・警備組織がもはや対応できなくなる。これは既に現在の時点で起きていることである。その結果、あばら屋や軍用施設、バラック、コンテナ、テント村、手入れのされていない野営

地などに難民キャンプが作られることになり、衛生的な状態を維持できない悲惨な状況が発生する。

また、出身国、宗教、宗教的分派、社会階層という点で様々な背景を持つ難民がキャンプにぎゅうぎゅう詰めされることで、お互いの間でトラブルや争いが生じ、それが深刻な結果につながることもある。

犯罪、病気、伝染病、殺人、故殺も、とめどなく蔓延する。食糧・飲料水の供給が不十分であることも、あらゆる災厄の発生に更に拍車をかけることになる。つまり、難民キャンプにおいても、それほど時間が経たないうちに食糧不足・水不足が生じる。

そして、難民自身の間でも、嫉妬^{しつと}、憎悪、けんか、殴り合いなどが発生し、けが人や、状況次第では死者が出ることにもなる。こうした事態が長引き、また増加するにつれ、難民をめぐる、様々な形態で真の混とん状態が生じ、更に監視官・監督官・警察官・税関吏など、国の治安に関わる全ての機関にとっても、

管理・規制・監視の手が及ばない状況やその他の問題が国境、また国内の両方で出現するであろう。

加えて、大量難民の流れによって、(ほとんどの場合は経済難民で、特にヨーロッパを始めとして他の国々に押し寄せる)、その期間が長くなりまた規模が拡大するにつれて、避難地の国々の国民、その行政機関、政府、政治家、政党において最も深刻、かつ震かんさせる問題が生じることになる。つまり、受け入れるか受け入れないか、すなわち認めるか拒否するかに関して、矛盾するエセ人道主義的な擁護派と拒絶派の見解・意見が、増殖する一方の難民の処遇・権利・再送還に関して、対立するのである。

難民の存在によって既に現時点で広範囲にはじまっていて、また将来においてもとめどなく拡大し続ける事柄は、世界中で人間が混じり合うという事態である。

これはもはや止めることはできな

い。何故なら現在、既に存在しているその原因に(すなわち難民の大量発生)、エセ人道的理由から歯止めをかけることができないからである。つまり、世界規模でのとめどない人種・民族の混合は不可避である。

その結果、混合人種からなる人類と、宗教やその分派の混合が発生し、そこから様々な敵対関係と憎悪が生まれることも、また同様に不可避である。気候変動によって、全体としてこのような全世界を巻き添えにして損害を与える結果がもたらされる。特に、気候の変化によって、立場の弱い不安定な国の数が増え、そこから難民の流れが生じるからである。

このことは更に当然ながら、難民の避難先である全ての国々で、難民の配分をめぐる深刻な争いが発生する。その規模は、独裁EUが加盟国に対して受け入れるべき難民の数を指示している現在のヨーロッパにおいて、既に発生している争いをはるかに凌ぐものになる。

結 論：

世界の全ての国々が、今後全ての種類の排出と天然資源の乱掘を世界規模で徹底的に制限しなければならないことが、明確に明瞭に言葉で表現されなければならない、そのために分別と理性が総動員されなければならない。

また、自然とその動物相・植物相に化学物質を投入し、化学物質と廃棄物で環境を汚染し公害をもたらす、環境を破壊することは、即座に禁止・中止されなければならない。

急激に拡大する人口過剰も、世界規模で国家の管理による効果的な生産規制を極めて早急に導入し実施することで、食い止めなければならない。

そうすることによってのみ、地球人類の運命の空にくっきりと浮き出る差し迫ったこの悲劇、既に世界規模で激烈で悪質な負の結果、破壊的で破滅的な結果を人類全体にもたらしているこの悲劇は緩和されうる。

気候を変化させているのは、空気中の汚染物質だけではない。そこには、自然とその動物相・植物相と気候に関して、人間が無節操さと破壊行為によってもたらした全ての結果が関わっている。現在の全ての自然災害は、その全体が、気候変動がもたらす結果に対する強烈な警告である。これに対して迅速な対策をとらなければ、最終的に地球は人類の必要最小限の欲求を満たすことすらで

きなくなり、従って増大する一方のエネルギー・食糧・水の需要をまかなうことは、もはや不可能になるだろう。

最善の方法での取り組みが行われないのならば、人口過剰によって引き起こされるあらゆる無節操な企みが、人類全体を巻き込む大規模な悲劇につながることは避けられない。

従って、世界の全ての国々は、この悲劇を避けるため、僅かなチャンスであろうと逃してはならないことを要求されているのだ。しかしそのためには、まず何よりも、世界規模で管理された出産停止を実現し、世界規模での出産管理を導入して、人

口過剰に迅速に歯止めをかけ、人口過剰がもたらした無節操な企みの結果生じた破壊状態から、自然とその動物相・植物相、そして気候を再び回復させなければならない。

やる気のない愚かで無用な役立たずの国際的気候保全条約が可決されれば済むような時代はとうの昔に終わっている。何故なら今求められているのは、分別と理性、そして断固とした思い切った明確で有用・有意義な行動だからである。それがなければ、地上の人類に迫る未来の悲劇を、最後の最後に食い止めることはできない。

付録スイスの面積：

国内の全ての山岳地帯・丘陵の総面積を含めて考えれば、スイスの面積は80000平方キロメートル超である。学校では、スイスの面積は41285平方キロメートルと教えられているが、これは、山岳と丘陵の総面積を含めない面積に過ぎないため間違いである。スイスの面積は少なくともその倍はあり、山岳や丘陵の絶壁、岩壁、斜面などの面積を含めた総面積は80000平方キロメートル超になる。これは、極めて精密な高度モデルとスーパーコンピュータを使った最新の測量と計算

でも明らかになっており、連邦地理局 (:swisstopo) がスイスの真の面積をテレビ番組『人間・技術・科学』(MTW) のために細部に至るまで新たに計算し直したとおりである。つまり、41285平方キロメートルという面積は、スイスの山岳や丘陵が全て全く平坦であると仮定した場合のみ正しい値ということになる。

SSSCにて

2015年7月21日22時39分

ピリー

シリーズ：FIGU in bezug auf Überbevölkerung Nr.2, Juli 2015

：FIGU人口過剰シリーズ2

原 題：Umweltzerstörung als Folge der Überbevölkerung

邦 題：人口過剰の結果としての環境破壊

発行：2016年1月

原作者：〈Billy〉Eduard Albert Meier

翻訳・監修：FIGU・ランデスグルッペ ヤーパン

校正：2015年12月



© FIGU Landesgruppe JAPAN 2015

社)フィグ・ランデスグルッペ ヤーパン

本文中の日本語翻訳文章の著作権は当社団に帰属します。

商業的利用に関しては下記にお問い合わせください。

〒193-0823

東京都八王子市横川町521番4号 社)フィグ・ランデスグルッペ ヤーパン

TEL 042-686-1379 : FAX 042-686-1378

発行責任者：社団法人フィグ・ランデスグルッペ ヤーパン

東京都八王子市横川町521番4号

郵便番号193-0823

連絡先：電話：042-686-1379

FAX：042-686-1378

E-mail：info@jp.figu.org

